

私はこう 考える

「共感」って
何だろう？

わたしとあなた

— 幼児の交渉する言葉に注目して —

鍋島恵美

子どもは、幼稚園に入園すると、家族とは違うあなたという多数の他者性と出会います。その暮らしの中で、もの・こと・ひとに関して他者と交渉せねばならぬことが起こってきます。つまり、幼児期は、コミュニケーションの力の基礎を築く重要な時期といえるでしょう。

私が勤務していた幼稚園では、幼児の「いや」「だめ」といった具体的発話を取り上げ、発話が出る状況、その後の展開についての研究に取り組んでいました。「いや」「だめ」という言葉は拒否

や禁止を表し、普通これらの言葉は人間関係を遮断する方向で使われることが多いにも思われます。しかし逆に、この言葉に注目したことで、①拒否や禁止の言葉が発せられる文脈、②拒否や禁止から展開される交渉、③規範意識の芽生えや、「子どもの言い分」などの論理展開に、発達的な特性が見られることや、教師の援助のありようがわかってきました。

ここでは、その研究の中でも、幼児が遊びを楽しみたい、面白くしたいという情動的な状況下で

立ち上がる交渉場面の特徴的なエピソードを取り上げて、わたしとあなたという関係性の視点から他者と喜怒哀楽の感情を共有する共感について考えてみたいと思います。

三歳児の物の取り合い

A、B、Cと教師がバケツに砂を入れてカレー作りをしている。教師もAと一緒に「カレーは、いかがですか?」と、雲梯で遊んでいるDらに持っていくと、Dは「いただきます」と食べるふりをする。そして、一緒にカレー作りを始める。

Dが「これ使う!」と抜き型を使おうとすると、Aは「だめ、これA君が使ってたし だめ」と言っただけ。Dが少し泣きそうになる。教師が「A君が使ってるんだね。Dちゃん、一緒に(同じものを)探して行こうか」と誘いかけると、Dは安心したのか笑顔になり、教師と一緒にカップを探しに行く。

このように所有権をめぐる取り合いが起こることがよくあります。三歳児では、「いや」「だめ」の言葉が出せる関係を育てることが大切な時期であり、教師は、わたしの主張(自己主張)を受け止めて、個々が自己実現できる援助が大事です。教師はAの「使っていた 貸したくない」という気持ち、Dの「使いたい」気持ちと個々の子ども気持ちに寄り添います。つまり、教師が共感しているのです。その教師の身の置き方や言葉を通して、子どもは、わたしとは違う他者の思いに触れ、わたしとあなたの関係を拓いていきます。

ところが、四歳児になつてくると、教師の援助のもとで交渉をしたりするようになってきます。わたしとあなたの違う世界をつなごうと試みる関係性が出来てくることがわかります。

四歳児の遊び場の取り合い

お弁当の後、E、F、Gがままごとをして遊び

始めた。すると、Hが「そこあかん！そこ、Hが使ってるねん、あかん」と大きな声で言う。突然、言われて三人は困惑している様子。弁当を食べ終わってHは、紙を切ったりしていたように思ったので、教師が「大きな声で、お友達、びっくりしてはるわ。Hちゃん、机のところで紙で作ってなかった？」と聞くが、Hは「ここ、Hが使ってるの」と言う。

教師は「Hちゃん使ってるの？」と再度聞いた。今度はHが「Hもするのー」と、足をバタバタさせて言う。そこで教師が「Hちゃんもままごとしたいの？」と聞くと、Hは「うん」と言ったので、教師が「一緒にしたら？」と言うと、Hは「入れて」と言った。するとE、F、Gも「いいよ」と言う。教師が「よかったなあ」と言うと、Hはうれしそうに笑う。そうしてしばらく一緒に遊んでいた。

教師は、まず、占有権を主張するHに困惑する相手の感情を代弁してから、今は使っていないのでは？と問い返します。そこからHの「ままだとがしたい」気持ちを言葉で引き出し、今度は、その自己実現に向けて「一緒にしたら？」と援助します。そして、「入れて」という言葉とともにHの気持ちが仲間に伝わり、交渉が成立します。

さらに、教師が「よかったなあ」と、瞬時にHの感情に共感し、言葉で返しています。そのように、教師の心情を伴った言葉を耳にすることは、双方が快の感情を共有することになり、わたしとあなたの間にも共感する関係を生み出していくと考えられます。

そして、そのことがわたしとあなたをつないでもいくことになり、やがて五歳児になると、順番やルールを守るという規範意識が芽生え、自ら「何で？」と理由を問いつつ、自分たちで交渉できるようなもなってきました。

五歳児の三輪車の交替

三輪車をこいでいるIの後ろからJが「Iちゃん替わって」と声を掛ける。しかし、Iは、三輪車をこいで遠くに離れながら「いや」と断る。Jは、Iが替わってくれないので、すぐ近くにいたもう一台の三輪車をこいでいるKに声を掛ける。Jが「替わって」と頼むが、Kも「だめ」と断わる。

Kから断られたので、Jが、もう一度Iに「替わって」と声を掛ける。するとIは、今度は三輪車を止めて「いやや」と言う。Jが「何で?」と聞くが、Iは答えずに三輪車をこいでいく。Jは、離れていくIの三輪車を追いかけて後ろに黙って乗る。Iは、特に気にせずそのままこいでいる。再び、後ろからJが「替わって」と声を掛けると、Iは「まだだめ、ちょっとしか乗ってないもん」と答えるので、Jが「替わってって、何回言

えばいいの?」と尋ねる。すると、Iは「仕方ないなあ」とJと交替する。そして、今度はIが「後ろ乗るで」と言うと、Jは「いや」と断る。が、Iは「乗る」と三輪車の後ろに乗る。それを見て三輪車をこぎながらJは「Iがんといてや」とIに言うのと、Iが「うん」と答える。

三輪車の交替をめぐる、所有権を主張するIと交替を要求するJのせめぎ合いが始まります。交替を要求するJに対して、聞いてはいるものの距離をとってから断るIの行動から、替わりたくない思いが伝わります。

断られたJは交渉の相手を変えますが、そこでも断られ、再びIに交替を要求します。今度はIも三輪車を止めて、「いや」から「いやや」と行動と言葉でいやな思いを強調します。Jは、その理由を「何で?」と問います。にもかかわらず、Iが答えないので実力行使に出ます。

IにもJの替わってほしい気持ちが伝わっているのですが、自分も乗りたいという思いを通すために、占有時間という正当な理由を言います。その思いを受けたJは、「替わってと何回言えばいいの?」と、頼む言葉の回数で交渉します。そこまで言われるとJの替わってほしい強い思いに押されて、「仕方ないなあ」とIが交替に応じます。それでも乗っていたい自分の気持ちもあり、「乗るで」と言葉で断ってから後ろに乗っていきます。JもIの気持ちに共感でき、Iの行動は受容するものの、「こがんといて」と、乗り手は自分であることを主張するのです。逆にIもJの気持ちに共感して、「うん」と受け入れていきます。IもJも、交渉を重ねる中でお互いの感情を共有しつつ相手に譲歩し、それなりに納得していきます。

幼児期は、コミュニケーションの力を獲得する重要な時期ですが、その力は、さまざまな感情の

うねり（共感）を通したやりとりの中で、自他をつなぐ言葉として獲得されていく様子がよくわかるのではないのでしょうか。（臨床発達心理士）



▲抱き合って喜ぶ
秋の自然に抱かれ

参考文献

- 1 岩田純一『子どもの発達の理解から保育へ』
ミネルヴァ書房 二〇一一年
- 2 森山卓郎・鍋島恵美他「遊びの広がり・深まりと
仲間づくり——いや・だめ（あかん）の言葉に着
目して——」京都教育大学附属幼稚園研究紀要
二〇一〇年
- 3 森山卓郎・鍋島恵美他「幼児のコミュニケーション
と談話標識（じゃあ）」京都教育大学紀要
二〇一二年